

説教 「いのちの神」

(列王記下 5 章 8-14 節 コリントの信徒への手紙二 12 章 9-10 節)

大串肇 牧師

アラム (現在のシリアにあたる) の軍司令官ナアマンは大いに手柄を立て、主君に重んじられていました。この人は勇士でした。しかし重い病を患っていました。最新の協会共同訳では「**規定の病**」(ツアラト) と翻訳されています。皮膚病の何かのようにも思えますが、その病については実はよくわかっていません。ただこの病になると、古代イスラエルの律法では宗教的な意味で汚れた者として定められ、共同体から隔離、排除されてしまいました(レビ記 13-14 章参照)。

さて、ひとりのイスラエルの少女が捕虜として連れて来られ、ナアマンの妻に仕えていました。ある日、この少女はイスラエルの預言者のところにいけば、その重い病をいやしてもらえると述べました。ナアマンがそのことを主君に告げると、王はナアマンにイスラエルに行きなさい、イスラエルの王に手紙を書く、と語りました。そして多くの金銀や着物の贈り物を持たせてナアマンを送り出しました。ところが、イスラエルの王はその手紙を受け取り憤慨しました。「わたしが人を殺したり生かしたりする神だとも言うのか。この人は皮膚病の男を送りつけていやせと言う。よく考えてみよ。彼はわたしに言いがかりをつけようとしているのだ」(7 節)。

預言者エリシャは憤慨し狼狽している王のことを聞き、使者を遣わして「その男をわたしのところによこしてください。彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう」と伝えました(8 節)。そこでナアマンは、何と戦車に乗ってエリシャのところに出かけて行きました。ところがエリシャは戸口にナアマンを立たせたまま、使者を通して「ヨルダン川に行つて七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります。」(10 節)と言わせました。このエリシャの態度にナアマンは激怒しました。というのは、常識的に言えば預言者の方が「自ら出て来て」来るのが当然です。ナアマンは自分「の前に立ち、彼の神、主の名を呼び、患部の上で手を動かし、皮膚病をいやしてくれるものと思っていた」(11 節)のです。

ナアマンは勇士であり、権力も持っていました。プライドも高かったのでしょう。シリア軍の隊長が戦車にのってわざわざイスラエルまでやってきたのに、出迎えもしないのですから彼が憤るのも無理はありません。また、当時、病気を癒すためには宗教的な儀式が行われ、そのために雇われた祭司や預言者はいたはずですが、しかし彼らは王にお金で雇われていたかもしれません。他方、エリシャは神から遣わされた預言者です。そこで憤慨したナアマンはヨルダン川で身

を洗うならば、ヨルダン川よりも故郷の川の方が良いと語って故郷に帰ろうとしました。そこでナアマンの家来たちがいいました。「**大変なことをあなたに命じたとしても、あなたはそのとおりにさったにちがいません**」。まして、「**あの預言者は、『身を洗え、そうすれば清くなる』と言っただけではありませんか**」と言って、ナアマンをたしなめたのです(13節)。そこでナアマンが家来たちの言うとおりにヨルダン川に入って七度体を清めると、体は元通りになり、「**小さい子供の体のようになり、清くな**」りました(14節)。

この物語で大きな役目を果たしたのは、ほかならぬ預言者エリシャです。彼は憤慨したイスラエルの王を宥め、敵対する外国人の王の申し出を喜んで受け入れ、病人を癒しました。そのことを通して、イスラエルには神の遣わした預言者がいること。その預言者が病人を癒す力をもっていることは、まさに「**人を殺したり生かしたりする神**」がいらっしやることの証です。エリシャはその証をたてたのです。他方、預言者は敬われていませんでした。ナアマンは癒されることを望んでいましたが、名誉や特権、権力や財力をふりかざした「**上からの**」態度でした。彼のプライド、傲慢さが救われることの一歩の障壁になっていました。ナアマンにとって最も必要だったことは謙遜な心でした。皮肉に聞こえるかもしれませんが、敵の捕虜として、奴隷とされながらも、自分に貴重な情報を伝えてくれた小さな少女の親切心、弱い立場にありながらも自分に助言を与えてくれた家来たちの勇気によって、ナアマンはエリシャのもとに来ることが出来、重い病が癒されたのです。

こうして彼の傲慢は打ち砕かれ、まさにその時、まさに身も心も「**小さい子供のように**」回復されたのです。こうしてナアマンは神に赦され、清められました。ナアマンは感謝と喜びに満たされ、神を信じるようになりました。彼は全員を連れて戻り、今度こそエリシャの前に立って言いました。「**イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられない**」と(15節)。これは信仰告白であり、礼拝です。

ところで、イエスは故郷ナザレでの伝道に対する激しい抵抗を受けた時、預言者は故郷では敬われることはないと言ったエリシャのことを引き合いに出されました。他方、外国人でありながら神を信じ、清められたナアマンの信仰を称賛されました(ルカ4:27)。わたしたち人間にとって病は相変わらず脅威です。しかし、より恐ろしいのは病ではなく、人間の罪です。それは傲慢であり、自分の力や地位を利用して他者を支配する欲望であり、差別や偏見でもあり、わたしたちはその罪に苦しんでいます。その罪深いわたしたちの命はいかににはかないものか、いかに無力であるかを思い知らされます。わたしたちの命は実にイスラエルの王が語ったように「**人を殺したり生かしたりする神**」の御手の中にあるのです。ただし、人間の一生を考えるならば、順序は生の後に死です。しかし神は「**人を殺し**

たり生かしたりする」神であると、自然の順序が逆転して、あたかもわたしたちに死の後に、生を与える神が語られています。生から死でなく、死から生です。これは何かの過ちでも偶然でもありません。聖書の信仰なのです。つまり、死と滅びから、永遠の命へわたしたちを移すことの出来る方こそ、わたしたちの主イエス・キリストを死者の中からよみがえらせたお方、唯一の神なのです。この「いのちの神」の「前に立つこと」、すなわち神を神として礼拝する礼拝にわたしたちは皆招かれているのではないのでしょうか。謙遜に自らの罪を告白しつつ、だれもが差別なく、信仰によってキリストによる御赦しといのちに与ることの出来ることこそ、真の喜びではないのでしょうか。